

Title	The Fukuryu Maru Incident : Science, Politics, and the US-Japan Alliance
Author(s)	Leonard, Graham Benson
Citation	
Issue Date	
oaire:version	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59255
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について ご参照 ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【2】

氏 名	レオナルド グラハム ベンソン Leonard, Graham Benson
博士の専攻分野の名称	博 士（国際公共政策）
学 位 記 番 号	第 2 4 9 5 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 9 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 国際公共政策研究科国際公共政策専攻
学 位 論 文 名	The Fukuryu Maru Incident: Science, Politics, and the US-Japan Alliance（第五福竜丸事件：核政策と日米同盟）
論 文 審 査 委 員	（主査） 准教授 山田 康博 （副査） 教 授 竹内 俊隆 准教授 中嶋 啓雄 教 授 米原 謙

論 文 内 容 の 要 旨

This dissertation examines from a historical perspective the case of the Fukuryu Maru No. 5, an incident in which a Japanese fishing vessel was accidentally exposed to nuclear fallout from an American hydrogen bomb test in 1954.

This study examines the strategic and political contexts of and motives behind the governmental decisions made during the subsequent crisis and reviews the steps taken by and considerations of the American and Japanese officials involved with the goal of providing a comprehensive evaluation of the crisis management undertaken by both governments. It also gauges the criticisms that have been levied against them in the years, particularly the accusations that the crisis itself was avoidable and that the American government's actions were primarily dominated by concerns over nuclear security.

It concentrates on four areas during the incident where the two governments sought to cooperate: nuclear security, medical treatment, scientific evaluation of nuclear environmental contamination, and financial compensation to the injured crewmen and Japanese fishing industry. It then explores how the difficulties the US government experienced in those four areas and the incident itself affected the status of the US-Japan alliance.

The study finds that although significant mistakes were made on the part of both governments, the crisis was most likely an unavoidable one. It was carried forward by largely unforeseen and unforeseeable factors, namely tensions remaining from the recently ended Occupation, unanswerable concerns on the part of the public and industry about the health effects of nuclear testing, and failures of communication.

It concludes that many of the criticisms, both contemporary and modern, that have been leveled against the US and Japanese governments at the time have been overstated; notably, that the overall role of nuclear security in the American response was in fact minimal. It also argues that the most dominant issue, although unrecognized as such at the time, was the question of radioactive contamination of Pacific fish stocks.

Finally, this study argues that failures in bilateral cooperation during the incident led to serious doubts by American officials towards contemporary American policy towards Japan, ultimately resulting in a “New Look” policy for Japan that prioritized the political and economic stability over increased Japanese contributions to defense.

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、1954年3月にアメリカが西太平洋上のビキニ環礁で実施した水爆爆発実験で日本の漁船「第五福竜丸」が被曝し、1955年1月に日米両政府間で決着がつけられた第五福竜丸事件をめぐる、日米関係の展開を明らかにする歴史研究である。日米両政府の未公開公文書を中心とする一次資料を広範に用いた本論文は、同事件への日米両国政府の対応を包括的に分析し、先行研究がこれまでに示していた歴史像に修正を加える成果をあげた。先行研究が十分には解明しなかった論点や、解釈が誤っていると本論文の著者が考える点について、一次資料を駆使した分析を通じてより明確でバランスのとれた解釈を示すことに成功している。

本論文は5章からなる。1章－4章は第五福竜丸事件の展開を分析し、第5章は同事件を歴史的に位置づける。第1章は第五福竜丸事件勃発後最初の2週間に焦点をあてる。アメリカ政府の対応に対する批判（被曝の責任を漁船側に押し付けようとした、軍事機密の保護を被害の実態解明よりも優先させた、被曝の程度を意図的に矮小化して世論の懐柔をはかった）を検討し、本章はそれらの批判を退ける。

第2章は第五福竜丸乗組員たちの治療をめぐるであらわれた、日米政府間の対立と日本の医療関係者間の対立をとりあげる。まずこの章は、当時のアメリカ政府が被曝した船員たちの診察と治療へのアメリカ政府派遣医師の参加が実現しなかった理由を誤解していたことを明らかにする。それに続いて、船員の一人が被曝から半年後に死亡した原因が頻繁な輸血を原因とする感染症であったとする見解が、アメリカによる責任逃れのための議論であるとは言い切れない、と論ずる。

第3章はアメリカによる水爆実験が起こした放射能汚染をめぐる日米間の対立をとりあげる。代表的な先行研究が、アメリカは意図的に放射能汚染を隠べいしようとしたとする見方をとっていたのとは異なり、本章はアメリカの科学者たちが放射能汚染について誤った推測をしていたにすぎない、とする解釈を示す。

第4章は補償問題に焦点をあてる。法的な補償ではなく政治的な補償を選択する点で日米両政府は利害が一致しながらも、間接的な損害の額について両政府の間で見解が一致せず、補償の最終的な合意に達するまでに10カ月 of 長期間が必要となった、と本章は分析する。

第5章は「第五福竜丸」事件がその後の日米関係に与えた影響をとりあげる。本章は、同事件において日本政府と折衝した駐日アメリカ大使が日本政府への信頼を低下させ、そのことがアメリカの対日政策の目標を日本の政治的安定と国内治安の向上を重視する方向へと変化させたという歴史像を描きだす。本章はその過程で、日米両政府が同事件の決着と日本への原子力発電の導入を何らかの形で取引し、とする見方を退ける。

このような内容をもつ本論文は、高い学問的な重要性をもつ。日米両政府の一次資料と先行研究とを渉猟した成果に基づく、第五福竜丸事件についての唯一の包括的な研究であり、先行研究が到達していた点を越える新たな知見をもたらした。しかも本論文は、なぜ、どの程度に、日米両国がとった対応が失敗であったのかという問題を設定し、それらの問題に答えることによって、政策提言上の示唆も含んだ分析を示したからである。

以上の結果から審査委員会は、本論文が博士（国際公共政策）の学位を受けるのに値するものと認定した。